

自分らしさの基盤づくりとかかわり！

—自分なりの基準ができること—

0 西 垣 吉 之 ・ 寺 見 陽 子 ・ 西 垣 直 子
 (中部学院大学短期大学部) (神戸親和女子大学) (黒野保育園)

＜問題の所在＞

1) 自分なりの基準が形成されること

本来、子ども（人）は、自分の感情を心地よい状態に仕立てていくように行動するものである。また、ここでは心地よさを求める心の動きが根底にあるものとする。例えば、生理的な欲求の充足を考えたとき、0歳児は自らの身体感覚からくる要求を充足させるために、泣くという行為によって大人を呼び寄せ、大人によってその要求を満たされていく。泣けば自分の生理的な欲求が満たされ、それが繰り返されることによって、その状態があたりまえの状態になる。そして生理的に心地よい状態が、その子にとっての“普通”になっていくのである。子どもにとってその“普通”はつまり感情の揺れや振幅が少ない状態であり、気持ちが安定した状態と言えよう。それは、その子の心の状態の一つの基準になる。

2) 基準が形成されないこと

基準とは自分が物事を判断する際の指標であり、自分が行動を起こすときの指標となる。人は基準がないと、その都度、状況に応じた判断を一からしなければならぬことになり不安定になる。

3) 基準が変わるということ

この基準は周囲の人や物とのかかわりの中で変化をしていくものとする。基準ができると、その基準とは異なる状況にであった時、そこで子どもはズレを感じるようになる。つまり、基準が形成されなければ、何がズレているのかを感じることができない。筆者らは、子どもの育ちは、人やものという環境との出会いの中で直面する葛藤を切り替えしながら、自分が心地よくいられる方向を探っていく過程において保障されるものであると考えている。葛藤とはズレを経験することである。そのズレを感じ、そのズレに対して自分を如何に調整していくか、自分を如何に置き換えていくか、そこに育ちがあるものとする。そのズレを調整していくことによって、新たな基準が生まれてくる。そして新たな基準が形成されると、それがまた、その子の安定の場となり、再び調整をしていくこととなる。この連続上に子どもの育ちが保障されるものとする。

4) 基準ができることと自分らしさ

判断の基準と行動の基準ができるということ、それは自分らしさの形成を意味する。物事に対する一定したとらえ方、一つのかかわりの道筋、対処の仕方が生まれるのである。それは“自分は”という主格の形成を意味する。一方、その“自分は”も変容していくものであるとも考えられる。

＜研究Ⅰの目的と方法＞

研究Ⅰでは、基準ができるということの意味を捉えるとともに、他者との感情のやりとりを通して、自分が心地よくいられる状態をつくりだしていく中に見られる自分なり基準＝自分らしいかかわりの変化を追うことを目的とする。方法としてJ男（平成12年7月生）の観察記録から自分らしさの形成に関する場面を抽出し解釈的検討を行う。

＜結果と考察＞

A [自分の基準ができることと基準が変わること] 2歳11ヶ月

J男が茶色のクラシックカー様の車をみて“変な車だね”という。“変な”という表現はこの時はじめて使われた。

“変な車”という表現が言葉をついて出てくるのはなぜだろう。“変”という概念の形成の裏には“普通”と言う概念の育ちがある。“普通”とは、彼にとってはニュートラルな状態で、それが彼に安定をもたらしているとも言える。J男は車がとても好きでミニカーで遊んだり、実際よく見ている。こうした中で彼にとっての“車”というものや名称に対する概念が形成されていく。その“車”は彼にとって、心地よさをもたらすものである。しかし、この茶色の車は、今まで彼が見かけたことのない種類のものであったため、彼が車に対して形成している概念を修正していくことを余儀なくされた。それは彼の安定を覆すことでもあった。そこで彼は感情の揺らぎを経験するのである。いずれ彼は“ちょっと違うぞ”というその部分も含めて“普通”という感覚を形成し、自分の“普通”＝“基準”に対する幅を広げていくことになる。そしてその幅が広がった状態が再びその子の“普通”＝“基準”となる。また、その安定した状態はいずれ、その子にとってはつまらなく飽きる状態になる。こうした自分なりの基準の形成は、認知の発達のもとより、感情の発達

においても見られるものと考え。次に他者との感情のやりとりに見られる基準の変化を追う。

B [他者との感情のやりとりを通して、自分が心地よくいられる状態をつくりだしていく中に見られる自分なり基準の変化]

子どもは、心地よい状態に自分を仕立てるように動くものである。自分を心地よい状態に仕立てるために、それぞれの時期でその子の心地よさを感じる基準は変わっていく。その一つに他者との関係における自己へのまなざしの向けられ方に対する変化がある。

1) 相手の不快感情を受け止めその状況を調整して
いこうとする心の動き 一相手の機嫌をとる行為一
2歳11ヶ月頃

お母さんが不機嫌そうにしていると、いつもは“お母さん”と読んでいるのにわざわざ“ママ”と話しかける。また、お母さんお料理上手?と話しかけたり、お母さん料理好き?と尋ねたりする。

この時、母親は機嫌をとられているということを感じる。相手の不快な感情の動きを察知し、それを間接的な手段によってお互いに心地よい状況に変容させようとする時期として捉えられる。

2) 相手との絆(関係)を確かめようとする心の動き 一わざと〜する行為一 3歳0ヶ月

洗濯物の上をわざと何度も三輪車で通り怒られる。母親が怒っても同じように笑いながら繰り返す。

怒られるということはわかりながら敢えて行動し相手の感情がどのように動くのかを試すことが面白いようだ。そのことで自分に気持ちを向けさせようとする。大人を振り回しながら、自分に向けられる気持ちの方向性を感じ、自分との関係性を確かめようとする。ここには、嫌と言っても自分が捨てられないことへの確信がある。この時期は大人を振り回すことで自分が捨てられない存在であることを確信しつつ、一方で大人との関係性を保つための手立てを学んでいく時期とも言える。

3) 相手がごっこの世界で同じ感情を抱いてくれるように働きかける心の動き 一共有の世界を楽しむもうとする行為一 3歳1ヶ月

1匹のネコのとなねこ大将のお面をかぶり、ねこになって遊んでいた。ネコになって遊んでいる時は、お母さんと同等の立場、同格の人間として遊んでいるような感じがする。その場では母親のことを、ただ楽しさを共有する人と感じているようである。そのため、対等の感覚が基本となっているために、いつもよりも快活な言葉が飛び交う。

また、母親に叱られると突然、J男が「ねこのおかあさん??」と問いかけることがある。ねこのお母さんになっているときはお互いに心地よい心の状態を共有でいるということ彼は感じているのである。そのため、こうした問いかけをすることがあるのではないかとまた自分がそのように振る舞うことで違う関わりをしてくれる他者の存在を感じているように思う。

この場合のように、自分がとなねこ大将に変身するのは、気持ちを変える手立ての一つになっているのかもしれない。怒られているという不快な状況を自分にとって心地よい状況に切り替えるために、ネコのお母さんになっている時の母親の姿を連想しながら、自分がネコになって関わればお母さんもネコになって楽しんでくれるというつながりを理解し、母親にネコになって関わろうとしているのである。

ネコになるということは、自分の中にもう一人の自分をつくることである。今までの自分ならお母さんに怒られたときには、そこから立ち直れない姿が多かったが、それをネコになることで、その場を乗り越えていこうとすることができる。自分の感情をコントロールしていこうとする力が培われていることがわかる。

また、母親の内にも2つの面(つまりネコになったときの母親の姿といつもの母親の内なる世界の動かし方が違うということ)を感じ始めている。違う関わり方をしてくれる他者の存在を感受しながら、いつもとは違う自分の感情体験をするとともに“自分らしさの幅”も同時に広げていくことになる。

4) 相手が喜ぶことをしていこうとする心の動き 一期待に応える行為一 3歳6ヶ月

夕食後の後かたづけの前に、両親が“今日は疲れた”と言っていることを聞いて、J男が突然、流しに食器を運んでくれる。黙ってみていると、食卓の上にある全ての食器を運んでくれた。そして運び終わった時に“Jちゃん、運んでくれた(運んであげた)”と言った。

周りの大人が喜ぶ行為をすることによって、自分に目を向けようとする行為として映る。そのことが彼にとって心地よさをもたらすことになる。相手の期待に応えようとする心の動かし方である。

<まとめ>

心地よさの感じ方が変容していく過程を追っていくと、感情の働かせ方が発達と共に多様化していくことがわかった。その多様化していくことそのものが、自分らしさを形成していくことにほかならないものと考え。